

近代日本における西洋の「音楽理論」の捉え方

—— 昭和初期までの分野観を中心に

西田 紘子 (九州大学)

近年「グローバルな音楽理論史」が提唱されるようになり、西洋の音楽理論が各国でどのように受容されたかや、ヨーロッパとアジア諸国の影響関係に関する事例研究が行われるようになった (Martin 2022, 西田・安川 2021, Ewell 2020, Walden 2019)。それに伴い、近代日本における西洋音楽理論の受容研究も進みつつある (安川・張 2024, 仲辻 2019)。一方、明治期以降の日本において西洋の「音楽理論」という語がどのように用いられてきたか、いかなる性質をもった分野とみなされてきたかの全体像については未知の部分が多い。昭和初期までの状況を一瞥すると、音楽理論に類似・隣接する分野の語として楽典や音楽美学、音楽史、音響学、心理学などがみられる。

そこで本研究は、明治期から、西洋音楽理論の受容姿勢が変化する昭和初期の戦前までを対象期間とし、音楽理論の語の用いられ方、捉えられ方の特徴を、周辺語との関係から明らかにすることを目的とする。これにより、西洋音楽理論の受容黎明期に、音楽研究の総体のなかで音楽理論がいかなる学問として位置づけられてきたのか、「理論」の語のもとに何がどのように希求されていたのかが歴史化できるだろう。

方法としては、明治期以降の書籍や雑誌記事における音楽理論という語の用語法や捉えられ方を網羅的に調査し、全般的な傾向および変化をたどった。その際はこの語をタイトルに含む書籍・記事 (翻訳書を含む) を対象の中心に置き、音楽概論等の書籍において音楽理論に一定量を割いているものや、『音楽世界』や『月刊楽譜』をはじめとする雑誌で行われている音楽理論をめぐる議論も対象に含めた。なかでも当該語を頻繁に用い、著述を残しているのは、高野瀏、田辺尚雄 (昭和6年の『音楽理論』)、辻壮一、門馬直衛 (昭和4年の『音楽理論講義』など) といった人物であり、彼らがこの語の近代的普及に少なからぬ影響を及ぼしている。その記述において具体的に誰のどのような論が音楽理論とされているかに分野観は依存し、さらにその背景には、音楽理論が上述の他の分野とどのように結びつけられ、その過程で何を争点とするかの分野間関係や、対位法や和声学といった音楽理論に含まれる領域間関係の違いが観察された。調査範囲の初期には、音楽研究における位置づけや、音楽理論とは何かをめぐる論争といった理念的な著述が多くみられたが、昭和期に入ると、音楽理論を普及させるための実践的方針も構想されるようになる。とりわけ門馬の著述活動が、堀内敬三の書評 (昭和4年) において理論と実践の関係をめぐる議論を引き起こすなど、音楽理論の学問としての性質が問われるようになった。学問性 (科学性) と実践性の間を揺れ動く複層的な音楽理論観に、この分野をめぐる学問史研究の要点が見出せ、グローバルな音楽理論史の一角を築く土台となるだろう。